

実践プログラム編

岡山県自然保護センター総合学習プログラム実践記録

行事名 たんぼ①「田植え」	担当者 森 生枝
ボランティア(依頼)：長尾弘子さん，高野佳郎さん (自主)：—	
現地指導員：佐伯町シルバー人材センターより久永幹雄さん，中家堅さんほか3名	
日時・天候：平成14年6月6日(木)，9：30～11：30，晴れ	
場 所：自然保護センター内のたんぼ	
参加人数：佐伯小学校5年生27名，引率教諭2名	
スペシャルメモ (行事の内容を一言で)，目標など 昔ながらの手植え	

 準備物

苗，張り綱，手綱・容器，救急箱

 聞き取り内容 (簡条書きで)

久永先生のお話

なぜ苗を植えるのか

- 陸稲：収量が少なく，食味が悪いので，廃れていった。
- 直播きをすると，雑草がたくさん生えて困る。
- 昔は1枚のたんぼで，麦作と稲作の二毛作を行っていたため，麦作と稲作とが重複する期間(6月頃)にイネの苗を作っていた。

苗の植え方

- 苗をそろえて持つ(5本から7本)，植えるときは苗に手を添えて，土に手を差し込むようにする。
- 植える場所が平らでないときは，そばから土を持ってきて，平らにしてから植える。
- 張り綱の赤い印の所に植える。こうすると次回，手押し除草機で株間を通るときにも作業がしやすい。

 観察した生きもの

トノサマガエル，トノサマガエルのおたまじゃくし，アマガエルのおたまじゃくし，イモリ，ドジョウ，タガメ1，オオコオイムシ，タイコウチ，トンボ類の幼虫。

 備考欄 (注意書き：簡条書きで)

- 畦を踏んでつぶしてしまった時には，各自直しておく。

プログラム進行			
時間	プログラムの流れ	進め方・留意点など	準備物など
9:30	開会（研修室） 日程説明，講師紹介		
9:35	講師のお話	「稲づくりの一年」について，久永先生のお話	
9:50	たんぼに移動		
10:00	植え方について説明	苗の本数，持ち方，植え方について	苗（久永先生で準備）
10:10	田植え	張り綱に沿って田植え開始 見つけた生きものについては適宜質問に答える。	張り綱
11:10	生きもの観察	やねみぞの動物を捕まえ容器に入れる。適宜質問に答える。	手網・容器
11:20	まとめ	見つけた動物の名前や特徴について説明。 捕まえた動物は元の場所に返す。	
11:20	片づけ	道具，手足を洗う。	
11:30	閉会，解散（現地）		

□ 参加者の反応

- たんぼに第1歩を踏み入れる（た）ときの反応が，子どもたち一人一人であまりにも違うので，まわりの大人は皆驚いた。
- たんぼの手伝いをよくしている子どもは，作業の段取りがほぼわかるらしく，手早く作業をして他の子どもの手本になっていた。
- 様子がつかめなくて，子どもたちは硬い表情であったと思う。

□ 実施者の総括

- 第1回目なので，最初に米作りについての講義を20分ほど行なうことにした。しかしこれは失敗で，説明をしてもわからない（イメージがわからない）子どもが大半であった。しかし考えてみれば無理もない。多くの子どもたちにはイメージを作るだけの体験や記憶の断片がないのだから。また，たんぼの作業は様々な小さな作業の連続で，しかもそれぞれの作業が複雑に関連しているから，体験のない人に作業行程を口で説明するのは至難の業である。今回の失敗を生かし，次回からは即たんぼに行き，簡単な説明の後，ともかく作業をやってみることにする。
- 今後の一連の作業のことを考え，少し強引に作業を進めた。細かいことを注意し過ぎた感もある。
- 田植えは張り綱に沿って一斉に行なう作業である。手早い子ども，ゆっくりと丁寧に行なう子どもと実に様々で，決して機械的には進まなかった。シルバーさんが子どものそばに入って横で手本を見せてくださったことは，とてもありがたかった。
- 張り綱を移動させるしばらくの間，生きものにも目がいていたようだ。イモリを見つけてお留守になっているところもあったが，子ども本来の愛嬌であり，これこそが昔の子どもたちが培ってきた生きものを見るまなざしだと思っている。またこれこそが，このプログラムでこちらが意図した自然観察の方法である。
- 解散前のまとめでは，みんなで集まり意見交換をるところまでには至らなかった。

岡山県自然保護センター総合学習プログラム実践記録

行事名 たんぼ②「草とり」	担当者 森 生枝
ボランティア(依頼)：長尾弘子さん，山田勝さん (自主)：— 現地指導員：佐伯町シルバー人材センターより久永幹雄さん，中家堅さん	
日時・天候：平成14年7月1日(月)，9：30～11：30，雨 場 所：自然保護センター内のたんぼ 参加人数：佐伯小学校5年生28名，引率教諭2名	
スペシャルメモ (行事の内容を一言で)，目標など 手押し除草機による草とり	

□ 資器材

手押し除草機5，ごぶり(一連)2，がんづめ3，手網・容器，救急箱

□ 聞き取り内容(箇条書きで)

久永先生のお話

- 昔の人は手作業で草とりを行なった。
- 一番草，二番草，三番草，はせごえ，四番草，ひえ切りと6回に分けて行なった。
- 夫婦2人で手作業でたんぼをくまなくやるのは重労働だったが，これしかなかった。
- 「草には命をとられる」と昔は言っていた。今では草とりの労力もなくなった。
- 除草剤が発達しすぎて，見られなくなった雑草もある。
- 昔の人は，目的はいっしょでも色々な機械を考案した。
- 手押し除草機：この幅しかかないという難点がある。
- がんづめ：しろかき・田植えをして踏んでしまったので，酸素を供給する目的で使う。
- がんづめで株間の泥をかたまりでひっくり返す——ぶくぶくとガスが出る——生えていた草を埋めてしまう——水面から出た土の所に草がよく生えるので，ごぶりです。
- ごぶり：かめのこう，たすり，の呼び名もある。

□ 観察した生きもの

トノサマガエル，トノサマガエルのおたまじゃくし，アマガエル，アマガエルのおたまじゃくし，イモリ10，ドジョウ(大)3，ドジョウ(小)3，サワガニ2，貝類卵塊? 1，ヒラマキガイ科1，オオコオイムシ雄(卵つき)1，オオコオイムシ幼虫2，マツモムシ幼虫多数，ヒメアメンボ(水田に多数)，オニヤンマ幼虫2，オオシオカラトンボ幼虫3，アカネ属幼虫1，ウスバキトンボ脱殻(休耕田)1，ショウジョウトンボ雄1，オオシオカラトンボ雄1，シオカラトンボ雄1，イトトンボ科幼虫2，フタバカゲロウ属幼虫2。

□ 備考欄(注意書き：箇条書きで)

- 手押し除草機は，子供用に角度を調節する。少し慣れると子どもでもうまく押して歩けるようになる。
- 多人数で行なう場合には(特に裸足なので)，除草機やごぶりの刃で隣の人を傷つけないよう気を付ける。

プログラム進行			
時間	プログラムの流れ	進め方・留意点など	準備物など
9:30	開会（現地） 日程説明，講師紹介 講師のお話 道具の使い方を説明	草とりを含めて，田植え後の作業のあらましとその意味について説明。 3種類の道具の使い方（実演）	手押し除草機 がんづめ ごぶり
9:45	草とり ・交替で除草機を押し ・株間は手でとる ・がんづめでガス抜き ・ごぶりでならす	個人個人のペースで進める。 ボランティアさんに入らせていただき子どもたちの手本になってもらう。 草とりの際などに目に入ってくる生きものについて，適宜質問を受ける。	
11:00	生きもの観察	やねみぞなどの生きものを見つける。	手網・容器
11:20	まとめ	見つけた動物について確認，説明。 生きものを元の場所へ返す。	
11:30	片づけ 閉会，解散（現地）	道具，手足を洗う。	

□ 参加者の反応

- 手でとった草を丸めて株間に強く押し込む，この作業のなかで，「草だんご」という言葉が生まれた。ボランティアさんが子どもの中に入ってくださり，手本を見せてくださったのはとても印象に残った様子。作業をしながら，なぜ草をとるの，なぜ除草剤を使わないの，などの会話に発展した。雑草は捨てるもの，と思っていた子どもは，それを埋めてたんぼの肥料にすると聞いてとても驚いた様子。作業をしながら，またボランティアさんとの会話の中で色々なことを考えたようだ。
- とった草は丸めて株間に強く押し込む，それが無理なときは畦に放り出す，と指示すると，子どもは最初混乱した様子。作業をやっていくうちにこの作業の意味について納得し，自分に合った方法を選んでいった。
- 手押し除草機，ごぶり，がんづめ，といった手作業のための機具に興味を持った子どももいた。

□ 実施者の総括

- 手でとった草を丸めて株間に強く押し込む，この一連の作業の中には，丸める，株間，強く埋め込む，の3つの要素が含まれている。押し込むには結構な力がある。作業の意味を理解して，子どもなりに工夫してやってくれたらそれでよしとした。ボランティアさんが陰になり日向になり，支えてくださったことに感謝している。

岡山県自然保護センター総合学習プログラム実践記録

行事名 たんぼ③「はせごえ」	担当者 森 生枝
ボランティア(依頼)：光岡明德さん，高野佳郎さん (自主)：—	
現地指導員：佐伯町シルバー人材センターより久永幹雄さん，中家堅さん	
日時・天候：平成14年7月17日(水)，9：30～11：30，雨	
場 所：自然保護センター内のたんぼ	
参加人数：佐伯小学校5年生28名，引率教諭2名	
スペシャルメモ (行事の内容を一言で)，目標など 草とりとこえふり	

 資器材

なえかご2，天秤棒1，フォーク2，背負いかご3，肥料袋，手網・容器・救急箱

 聞き取り内容 (箇条書きで)

久永先生のお話

- はせごえ：稲株の通りの間へこえをはせていく。
- はせごえ：化学肥料がない，すぐに効くというものではない，毎年毎年根気よく入れて稲の増収を図った。こやし，有機物を混ぜて，山の草やわらを押し切りで切ったもの，木の葉とが入れられる。
- 有機質 (刈った草，落ち葉，しば) の肥料：増収ではなく体にいい，作物にうまみがあるなどの利点があるが儲けは少ない。
- 昔はしばを刈って押し切りで切って牛に踏ませた。
- 今はどこに行っても草が茂りすぎている，昔はしばが不足していた。草を焼いたりするのはもったいないなあと思う。ひと昔前の人間はものをうまく利用して，生きものと共存共栄してきた。

 観察した生きもの

トノサマガエルの子がえる，アマガエルのおたまじゃくし，ウスバキトンボ2，キイトンボ雄1，ホソミイトンボ2，マツモムシ，ヒメアメンボ。

 備考欄 (注意書き：箇条書きで)

- はせごえ (こえふり) をする際に使う袋 (スーパーの袋など) は各自で持参する。家にかごなどがある人は持ってくるよう，先生に伝えた。

プログラム進行			
時間	プログラムの流れ	進め方・留意点など	準備物など
9:30	開会（現地） 日程説明，講師紹介 講師のお話	草とり，はせごえについて説明	
9:40	草とり	7/1以後に伸びた草を手でとる。とった草は株間に押し込む。または畦に投げ出す。	
	はせごえ	3月に落ち葉とぬかで仕込んだ堆肥を木枠からフォークで出し，背負いかごに入れてたんぼの脇に運ぶ。	フォーク 背負いかご なえかご
		各自持参の袋に小分けして，株間にはせこむ。また，なえかごで運んで，ボランティアさんが担ぎ，子どもたちがその周囲にはせこむ。	天秤棒
11:00	やねみぞや休耕田の生きものの観察		手網・容器
11:10	まとめ	見つけた動物の確認，説明。 適宜質問を受ける。 生きものを元の場所へ返す。	
11:20	片づけ	道具，手足を洗う。	
11:30	閉会，解散（現地）		

□ 参加者の反応

- 草とりにあたっては，うまくとれない子もいたし，稲が足に触れるのでかゆいがゆいを連発する子，カエルが気になって草とりができない子などもいた。初めてのことなので上手にはとれていないが，みんなその気になって草とりをしていた。
- 稲にかかった堆肥を振り落とすアイデアを2人の女の子がだして，実際にやって見せてくれた。久永先生がしきりに感心され，「あいがも少女」，「あいがも姉妹」の言葉が生まれた。

□ 実施者の総括

- ボランティアさんといっしょに行なう作業，会話の中から子どもたちは色々なことを教わり考えていたようだった。望ましい形である。あらためてボランティアさんの厚意に感謝する。
- はせごえにあたっては，3月に仕込んだ堆肥を，自分たちでかごに入れ，たんぼ脇まで持ってくる，という行程も行事に組み入れた。できるだけお膳立てせず，できるだけたくさんメニューを用意したいと考えた。たんぼの作業を一連のものとしてとらえてほしいと願っているからである。

岡山県自然保護センター総合学習プログラム実践記録

行事名 たんぼ④「稲刈り」	担当者 森 生枝
ボランティア(依頼)：長尾弘子さん，水内京さん (自主)：－	
現地指導員：佐伯町シルバー人材センターより久永幹雄さん，中家堅さんほか8名	
日時・天候：平成14年10月21日(月)，9：30～11：30，くもり	
場 所：自然保護センター内のたんぼ	
参加人数：佐伯小学校5年生29名，引率教諭2名	
スペシャルメモ（行事の内容を一言で），目標など 稲刈り，はでかけ	

 資器材

のこがま30丁，はで用竹（太く長い）3本，はであし30本，結束用わら1束，かま手入れ用油・布，手網・容器，救急箱

 聞き取り内容（箇条書きで）

久永先生のお話

- 稲の持ち方，のこがまの使い方：スパッと切る。
- 刈った稲は5株分くらいをかためておく。その際，1株毎に少しずつずらして置いて，その後結わえると，はでに架けたときに落ちにくい。
- 稲束の結わえ方：ねじはせ

 観察した生きもの

トノサマガエル，イモリ，ドジョウ，オオコオイムシ，ハネナガイナゴ，オンブバッタ，ウラギンシジミ，マユタテアカネ。

 備考欄（注意書き：箇条書きで）

- はでに架けた後にも，イノシシが穂を食べるおそれがあるので，トタン柵は脱穀前まで設置することにした。
- イノシシよけのトタン柵で手を擦ると，縫わないといけなくらい深く切れるので注意する。
- たんぼが柔らかいときは長靴の用意も必要。

プログラム進行			
時間	プログラムの流れ	進め方・留意点など	準備物など
9:30	開会（現地） 日程説明，講師紹介 講師のお話	講師およびボラの紹介 日程説明 作業にあたっての注意など。	
9:40	稲刈り 結束 はでかけ 落ち穂ひろい かまの片づけ	のこがまの使い方，イネの持ち方について説明。 作業の進行にあわせて，結束の仕方，はでかけの要領について随時説明，指導。 のこがまには油を塗り，片づける。	太く長い竹 はであし のこがま わら 自転車用油・布
11:00	生きもの観察 生きもの確認	やねみぞで生きものを探し，容器に入れる。 適宜質問に答える。 見つけた生きもの名前や特徴について説明。 生きものを元の場所へ返す。	手網・容器
11:20	まとめ 片づけ	質問を受ける。 道具，手足を洗う。	
11:30	閉会，解散（現地）		

□ 参加者の反応

- 田植え，2回の草とり，はせごえ，と稲の成長に関わってき，稲作りのクライマックスとして，子どもたちなりに気合いが入っていたようだ。
- 「ねじはせ」は子どもたちにとっては少し難しいようだった。シルバーさんが子どもたちの間に入って教えてくださったことはありがたかった。
- トタン柵のすぐ脇にイノシシの掘り跡が多く見られたことから，トタン柵の威力が非常に大きいことをまざまざと感じたようだった。

□ 実施者の総括

- 子どもたちは自校で行われた10/18の研究授業で久永先生より米作りについて講義を受け，稲の刈り方，結わえ方についても実演を見て予め学んでいた。そこで当日は，おおむね久永先生の実演から入った。
- 特に指示しなかったが，かまを持参してきた子どももいた。家の人から教わってきたと思われ，この学習の成果の一つといえる。
- 子どもの背に比べて，はでが高いので，大人が補助する必要がある。シルバーさんの応援が得られたことはありがたかった。

岡山県自然保護センター総合学習プログラム実践記録

行事名 たんぼ⑤「落ち葉かき」	担当者 森 生枝
ボランティア(依頼)：森田真知子さん，高野佳郎さん (自主)：—	
現地指導員：佐伯町シルバー人材センターより久永幹雄さん，中家堅さんほか5名	
日時・天候：平成15年1月10日(金)，9：30～11：30，晴れ 場 所：自然保護センター内のたんぼ 参加人数：佐伯小学校5年生27名，引率教諭2名	
スペシャルメモ (行事の内容を一言で)，目標など 来たる田植えに向けての準備と，ごぼうび，焼きいも	

 資器材

フォーク2，くまで30，背負いかご25，ぬか，(さつまいも，アルミホイル，新聞紙)，バケツ6，たきもの(乾燥)，たきもの(生木)，じょれん，スコップ，救急箱

 聞き取り内容(箇条書きで)

久永先生のお話

堆肥について

- 堆肥は温度と材料で決まる。
- 青草を使うと熱が出て，夏であればすぐ発酵して堆肥ができる。
- バケツで水を入れ，材料，温度があれば早く発酵する。
- 今日は水の代わりに氷を入れた。

今日の作業について

- 今日は，山から落ち葉や小枝をもらってたんぼに入れること，7月に行なった「はせごえ」で使った堆肥をこれから作ることを説明。
- 落ち葉かき：くまでで落ち葉や小枝をかいてかごに入れ，背負ってたんぼのそばまで持って帰る。
- 堆肥づくり：落ち葉や小枝を木枠に移し，ぬかも混ぜこんで踏み込む。

 観察した生きもの

- 前年6月に，青草(主にススキ)，落ち葉，ぬかを踏み込んで仕込んだ堆肥を木枠から出す際，カブトムシの幼虫が少なくとも10匹は見られた。コガネムシ類の幼虫も見られた。

 備考欄(注意書き：箇条書きで)

- くまで・かごは1人に1つずつ準備すると，各自で良い方法を考えながら自分のペースで進めることができる。
- さつまいも，新聞紙，アルミホイルは各自で準備する。

プログラム進行			
時間	プログラムの流れ	進め方・留意点など	準備物など
9:00	熾き火準備	シルバーさんにより準備	たきもの じょれん スコップ
9:20	芋の準備（現地）	さつまいもを新聞紙でくるみ、水に浸し、さらにアルミホイルでくるむ。	水、バケツ
9:30	開会 日程説明、講師紹介		
9:35	講師のお話	作業の方法や意義について	
9:40	堆肥を木枠から出す	昨年6月に仕込んだ堆肥を木枠から出す作業をしながら、堆肥とはどのようなものかを知る。	フォーク
9:50	落ち葉かき*	たんぼ奥の林で落ち葉かきをする。集めた落ち葉は背負いかごで運び、たんぼのそばに持ち帰る（1回目）。	くまで 背負いかご
10:10	落ち葉を木枠に入れる* ぬかを混ぜて踏み込む*	ほぼ全員が帰ってきた時点で行なう。木枠に落ち葉を詰め、ぬかを混ぜ踏み込む。約5人ずつ交替で行なう。	ぬか
10:20	熾き火に芋を入れる *繰り返す	芋を入れる。 *同様に2回目を行なう。	
11:00	試食		
11:20	まとめ	講師への質問、感想を聞く。今回、および今までを振り返る。	
11:30	閉会、解散（現地）		

□ 参加者の反応

- 落ち葉の中に寝てかくれんぼをする、持ち帰った落ち葉をトランポリンのようにして踏む、氷を割って水の代わりに堆肥に混ぜ込むなど、自然の中の色々なもの、場面が子どもにとっての遊びになっていた。
- 29人の個性および作業のペースが大きく異なるので、この行事のようにマイペースでできるものは、子どもたちにとっても心地よいものであるように感じられた。作業が早く終わった子どもは、自主的に片づけを行っていた。

□ 実施者の総括

- 5回の中でいちばん手応えを感じたのがこの行事であった。その魅力は何なのだろうと考えている。稲刈りを終えた達成感、次の田植えに備えて今から準備をするという余裕、明確な目的意識、作業が徒労ではなく着実に次につながっていくという満足感。頼もしい使命感に燃えているようにも見え、こちら胸がすくようなすがすがしさを覚えた。
- たんぼと林とが子どもたちの感覚の中でつながってほしいと願っている。

子どもの感想〈たんぼコース〉—佐伯町立佐伯小学校5年生—

作業後、子どもたちはワークシートを作成しました。その中から一部を掲載します。

チャレンジ!! お米と



1月10日(金)

野山ふさふ

☆ 田植え・草取り・はせごえ・稲刈り・落ち葉かき・・・今までの活動を振り返っての感想を書いてみましょう。

田植え

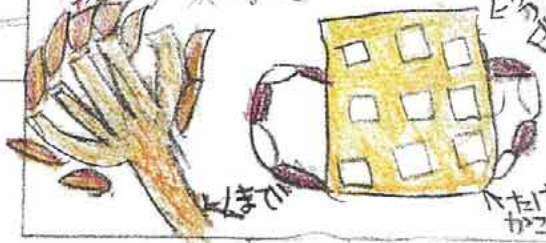


はせごえ



田植え

落ち葉かき



草とり



稲刈り



田植えの時は初めてなえを植えたけど、自分には「まあ、いい人じゃないかな?」と思いました。

でも、やっていくうちに、たんたんできてきて、うれしかったです。

草とり

草取りは、よくやっているのでも、そんなに大変じゃありませんでした。

草をとって、その草をなえの栄養にするのは知りませんでした。



野山ふさよ（続き）

（はせごえ）

肥料をまきました。まいたとき、足に木などがささったので、ちょっと痛かったです。

（稲刈り）

稲刈りをするのに、たくさん本で調べました。稲を刈るのはむずかしかったけど、干すのはかんたんでした。そのわらでおかざりを作りました。お正月にもかざりました。

（落ち葉かき）

山まで行って、落ち葉をかき集めて、たけかごに入れました。その間においもを焼きました。おいしかったです。

安養寺正人

- 落ち葉をあんなにもってくるとはおもわなかった。
- 田植え、草取り、はせごえ、稲刈り、落ち葉かきがぜんぶきびしかった。
- 稲刈りのきるのが、おもったよりきりやすかった。
- 草取りの草を取るのがむずかしかった。
- まえ田植えをして、植えていて、いがいにむずかしかった。
- 落ち葉かきで、落ち葉を取るとき、いっぱいあって、いっぱいとれた。
- まえ、自然保ごセンターにいったとき、いけの生きものをもってイモリやカエルがとれた。
- 落ち葉かきをして、大きなはこに落ち葉をいれて中に入ってふんだりした。
- 落ち葉かきのところに行ったら落ち葉がいっぱいあったから、竹かごにいっぱい入れて、たんぼにもってきて、大きいはこに入れて、ぬかを入れたり、そのはこの中にはいって落ち葉をふんだりした。

井上 勇輔

かごの中にくまででおちばを入れておして、また入れておさえて、また入れてと、なんどもおちばを入れてせおってみると、とてもおもたかったです。それをひりょうをつくる大きなはこに入れてみんなでふんで、米ぬかを入れてくさらせて、それから氷を入れてひりょうにするそうです。

ほくたちがつくって、つぎにやる人が、ほくたちがとってきたおちばをつかって、お米をうまくつくってくればいいなと思います。

今田 千裕

私がいままで一番心に残ったことは、田植えです。私は田植えをしたことがなかったので、田んぼがあんなに気持ち悪いことを知りませんでした。だから、田んぼに入った時は、田んぼがニユルニユルしていて、すっごく気持ち悪かったです。でも、私にとっては一生忘れることのできない思い出になったと思います。

内田 有香

今日は、大きな箱の中からひりょうをとり出していたら、大きなカブト虫の幼虫がでてきて、すごくきもち悪かったです。それから、大きな竹かごとくまでを使って葉っぱを竹かごでせおって、くまででかき集めて、たくさん葉が入っているので、おもたかったです。

稲刈りの時は、最初カマがこわくて、ぜんぜんできなかったけど、みんなや久永先生がすごい早く稲を刈っていたので、私もがんばってみようと思って、ゆっくりだけど稲を刈りました。それから、刈った稲をたばにする時、ボランティアの人におしえてもらって、私はできるようになりました。はで干しに干す時に、なにかのよう虫がいました。私はびっくりして、すごくよう虫がきもち悪かったです。

浦上 紗世

最後にこうやっておちばかきをして、とてもたのしかったし、勉強になりました。それから、さつまいもを焼いて食べて、とても最後だというようには思えなかったです。私はこれで最後なんだなと思いました。

あと、稲刈りがとてもたいへんでしたが、とても心にのこりました。

今思うと、さいしょはこんなのでやっていけるのかなと思ったけど、今こここまで来てほんとはよかったなと思いました。

高坂 章稔

ほくはおちばをあつめてかごに入れるのは、はじめてでした。さいしょは、いやだなと思ったけどやってみるといがいにおもしろかったです。これからもやれるときがあったらいいなと思います。

ひりょうになるのは長い時間がかかる。そういうことがわかったのは、はじめてでした。

長宗 武司

- 肥料をはっこうさせるには、とても時間がかかることがわかりました。
- 水のかわりに氷を入れたのがおもしろかったです。
- 落ち葉かきをしていると、落とし穴があったのでびっくりしました。
- 久永先生は、小さいころからいろいろなけいけんをつんでいるんだなと思いました。
- 草取りのときにくさだんごをどろの中にうめこむのが、すごいちえだなと思いました。
- 初めてした米作りをして、いいけいけんになったなと思いました。
- 竹かごはおもたかったです。やきいもは新聞で包んで水につけて、アルミホイルに包んで焼きました。できあがったいもは、ほくほくしてとてもおいしかったです。
- 久永先生から学んだことは、とても勉強になりました。

永宗 裕己

- 落ち葉かきは楽しかった。
- くまではそんなに使わなかった。
- 落ち葉かきをしたところは、今まで行ったところではないので、こんなところがあるんだなとびっくりした。
- 田植えや草取りの時に生きものをとるのも楽しかった。
- いいひりょうになるには速度がおそい。
- 氷を入れると少し早くはっこうする。
- 田植え、草取り、はせごえ、稲刈り、落ち葉かきの中では、稲刈りと落ち葉かきが楽しかった。
- やきいもがおいしかった。いもはなすびの形だった。
- 落ち葉を集めるのは楽しかったけど、重たかつ

た。使ったのは、かごとくまで。

- ほくの家もお米を作っているけど、自然保護センターで米作りをして、初めて知ったことがたくさんあった。

原 光輝

最初、田植えをする時「やだなあー、お米を作るなんて」と思っていたけど、だんだんなれてきて、楽しくなってきました。

ほくの心にのこったのは、稲刈りです。それは、最初のほうはぜんぜん切れなかったけど、最後のほうははっこう切れて、スパスパ切れるようになったのがうれしかった。

藤井 芽依

最初はくまでの持ち方もわからなかったけど、やってみると楽しかった。葉をあつめてはこぶのが重くてたいへんだった。

お米作りがおわるのがとてもざんねんです。

松原 康太

おちばかきでおちばをかごの中に入れてもってかえるのがおもたかったです。もう一回行ってくまででおちばを集めているときに、林君がほくのかごに入れてくれました。とてもうれしかったです。やきいもがとてもほくほくしていておいしかったです。

草だんごを作っているときに手をすこし切ってしまいました。

宮内 大

- ひりょうの中にはバクテリアがいる。
- 葉などがはっこうして、ひりょうになる。
- 楽しかったし、やきいももとってもおいしかった。
- おちばかきのとき、かごにおちばを入れてはこんだらとてもおもかった。カブトムシのような虫がでてきたのがすごくびっくりした。足でおちばをふんだのもとっても楽しかった。
- 作った米でおにぎりを作りたい。
- おちばをふんではっこうさせたやつを、つぎの人がつかうのがうれしい。
- 6年生になったらこんどはもち米を育てたい。

担任の先生の感想〈たんぼコース〉

米作り体験学習を通して

佐伯町立佐伯小学校 5年担任 小川 智世実

本学習では、自然保護センターの森先生をはじめ、多くのゲストティーチャーの方々やボランティアの方々に協力をしていただき、無事お米の収穫の喜びを味わうことができた。米作りのさかんな地域にもかかわらず、実際に米作りを体験したことのある児童が29名中数名しかいない中で、子どもたちにとって初めての手作業中心とした米作りは実体験による驚きと喜びがあふれた楽しい学習だった。

感想と反省

1. 地域の方との交流（ボランティアやシルバー人材センターの方々のご協力）や実体験を通じた学習

教師以外の地域の方々に説明を聞いたり、実際の作業の仕方を教わったりなど、生きた学習が大変貴重だった。ゲストティーチャーによる、その場その場での適切な指導や助言には、昔ながらの生活の知恵が息づいていて、子供たちにとってとても興味を引く内容だった。また、見ていると何気ない作業の中にさまざまな昔ながらの工夫や知恵があり、子どもたちはその知恵をさっそく使って実践してみることで、生きた知識とそれを利用する喜びを感じていた。また、お飾り作りでは、ゲストティーチャーの久永先生の鮮やかな手つきに子どもたちは歓声を挙げ、実際自分たちも挑戦してみることで、見ることと実際することとの違いに気づき、「久永先生、本当に名人なんじゃない。」との声も聞くことができた。

2. 田での生き物とのふれあい

田での作業後に、田の周りに住む生き物とのふれあいの時間があり、自分たちの住む地域では見られない生き物に触れることができた。季節ごと

に見られる数や種類も変化し、自然と向き合えるひとときを児童はとても楽しみにしていた。また、「なぜここにはこんなに生き物がいるのか。」という疑問を持つ児童もおり、その疑問についてもっと追求していく学習も取り入れれば良かったと思う。

3. 実際の田での作業の回数設定

猪垣や道具の準備など、ボランティアやゲストティーチャー、センターの方々に用意していただくことも多く、「お客様」的な部分があったと感じた。そのためには一年間の行事などとの兼ね合いを見通した年間計画と、1回の時間数を短くすることなどが挙げられる。夏季休業中にも数回作業日を設定するというのもできるだろう。

4. これからの活動

「収穫したお米を食べたい!!」「お世話になった方々とパーティーがしたい。」との声子どもたちから出ており、2月に「お米パーティー」を計画中である。



久永幹雄先生作の「わらぐる」。とれたわらの一部はお飾りに使い、残りはわらぐるにしていた。